

の離発着に影響を与える局地気象現象の中から、空港に侵入する海霧について構造状態の変化の解析を行い、量的予報法の確立を目指した調査を進めている。

以上のように今会員が行っている調査研究は、今後の

成果が大きく期待され、気象学および気象業務の発展に大きく寄与するものと考え、本学会はここに奨励金を贈るものである。

1992年度山本・正野論文賞の受賞者決まる

受賞者：田中 博氏（筑波大学地球科学系）

対象論文：A Numerical simulation of amplification of low-frequency planetary waves and blocking formations by the upscale energy cascade.

Monthly Weather Review, vol. 119 (1991), 2919-2935.

選定理由：ブロッキング現象のメカニズムは、現在の気象力学・大気大循環論の分野で未解明のまま残されている大きな問題のひとつである。近年、この現象には、総観規模擾乱の強制による低周波プラネタリー波の増幅というupscale energy cascade が重要な役割を果たしていることが、いくつかの観測のおよび理論的研究により示されている。この現象に関連しては、大規模地形と帯状流との相互作用や海陸の熱的コントラストなどによるブロッキングの形成も以前から示唆されている。一方、観測的研究からは、ブロッキング現象がある地理的位置や季節に集中して起こりやすいことも示されている。

本論文は、著者自身が開発した三次元ノーマルモード展開によるプリミティブ方程式系をもとに、必要な非線

形効果を正確に含め、しかも可能な限り簡単化したモデルにより、非線形の初期値問題としてこの方程式系を解き、以下のような興味深い結果を示したものである。即ち、北半球冬の平均場に微小擾乱を加えて数値積分を行った結果、南北に dipole 構造を持つ Charney モードがブロッキング現象に対応する波数領域（つまり超長波域）で固有モードとして卓越すること、その成長には、傾圧不安定擾乱から超長波への upscale なエネルギー輸送が重要であること、しかもこのエネルギー輸送は、大規模山岳によって増幅された波数 2 の定常プラネタリー波の存在下でのみ効率よく起こること、などを明らかにした。この簡単化されたモデルに用いられているいくつかの仮定条件は今後より詳細な検討を要するものではあるが、本論文で数値的に再現されたブロッキング現象は、現実にはしばしば観測されるものと類似しており、この現象の物理過程にひとつの新しい解釈を与えたものとして高く評価できる。よって、日本気象学会は、本論文に対し今年度の山本・正野論文賞を贈るものである。

日本気象学会関西支部 例会・講演会のお知らせ

第1回例会

日時：1992年10月23日（金）13時30分～17時

場所：京都地方気象台会議室

テーマ：「大規模現象・メソ現象・台風」

講演会：「台風に関する最近の研究」

光田 寧（京都大学防災研究所教授）

第2回例会

日時：1992年10月30日（金）13時～17時

場所：広島地方合同庁舎4号館2F11号会議室

テーマ：「中小規模現象・局地気象」

講演会：「雲の発生と降水過程の微物理」

山下 晃（大阪教育大学教授）

第1回・第2回例会の講演申込要領

・申込先 日本気象学会関西支部事務局

（大阪管区気象台内 〒540 大阪市中央区
大手前 4-1-67 TEL. 06-941-0341(代)）

・申込内容 氏名、所属、題目、スライド・OPH 使用有無および発表する例会を明記のこと。

・申込締切 9月14日（月）

・原稿締切 9月30日（水）必着